

# 「長い16世紀」と東アジアのグローバリゼーション

小林 哲也

## 目次

1. はじめに
2. 天正・慶長遣欧使節のインパクト
3. 紀行

## 1. はじめに

慶長の遣欧使節（1613年）については名前だけは知っていたものの、「そのとき」まではほとんど知識も関心も持っていなかった。それは2020年の暮れ、東北大震災の震災遺構を訪ねる旅の途上、宮古・釜石・女川と南下して、牡鹿半島を横断しようとしているときであった。「サンファン・パーク」という道路標識を見かけて、たまたまそちらに向かってみることにしたのである。そこは、伊達政宗がバチカンに向けて派遣した慶長遣欧使節の使節船サン・ファン・パウティスタ号の実物大復元模型を展示する博物館であった。3.11の震災で傷んでいたものの、全長50メートルを越える帆船が船台に繋がれ、その周りが宮城県慶長使節船ミュージアムとなっていた。こんな大きな船が江戸時代初頭に作られていたのかと感嘆しながら展示を見て回ると、使節が伊達政宗によってメキシコとの通商交易を目指してスペイン国王およびローマ教皇のもとに派遣されたこととある。鎖国に向かう徳川時代という通念とは逆に、伊達政宗は太平洋・大西洋を越えてスペイン帝国に働きかけるという壮大なプロジェクトを構想していたのである。後から調べたところによると、確かに家康も、スペインとの交易に前向きであり、その視野にはメキシコも含まれていたらしい（平川 2018:123）。秀吉の「伴天連追放令」（1587年）から、家康の「禁教令」（1612年）に至るキリスト教排除は、カトリックによる布教と一体となった交易すなわち「商教一致主義」を対象としたものであったともいわれている（大泉 2017:45）。ヨーロッパとの交易とその技術には、両者ともに注

目していたことは、間違いない。

このサン・ファン館訪問をきっかけに、支倉常長とその使節団について徐々に調べはじめることとなった。支倉常長はスペイン国王への訪問前後によりやく現地で洗礼を受けるなど、どう見ても宗教的情熱に導かれていたとは考えられない「使節」である。また現地で歓待されたとはいえ、通商上の交渉は成果が得られなかった。帰国後には、キリシタン禁止令が徹底されてこの巨大なプロジェクトは失敗に終わり、支倉常長も失意の内に世を去ったと伝えられている。慶長使節は、スペイン出身のフランシスコ会司祭ルイス・ソテロ側が主導し、スペイン滞在やバチカン訪問などでさまざまな便宜を図ったとされている。しかし、この使節団について、藩主（政宗）も常長も洗礼を受けたキリスト者でないことや日本国内でキリシタンへの弾圧が強まりつつあることなど、使節にとっては不利な情報をスペインやバチカン側に伝えたのは、ポルトガル系のイエズス会であった。当時の世界はトリデシリャス条約によりスペインとポルトガルとで2分されていたが、ちょうど日本の東北地方がその分割線に当たっていた。また日本での布教方針についてもフランシスコ会との間で対立があり、イエズス会主導の天正使節のような大成功は望むべくもなかったのかもしれない。すると、慶長使節からさかのぼって、天正使節派遣の経緯やその後のキリシタン弾圧の流れなども知る必要があるのではないか。かように、たまたま立ち寄ったサン・ファン館の展示から、日本におけるキリスト教伝来とその普及・弾圧の歴史、大航海時代以降のスペイン・ポルトガルの交易ルート、宗教改革からプロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」などへの問題群が立ち現れ始めた。さいわい2023年度の特別研究休暇を取得することができ、日本のキリシタンゆかりの各地や天正・慶長遣欧使節の足跡を辿ってみる余裕が生まれた。宗教にも歴史にも門外漢の身ではあるが、グローバリゼー

ションや西欧近代科学の起源、その日本への影響などで大いに学ぶところがあると見立てて、リスボンおよびセビリアからローマに至る40日間の旅に出立した。特別研究休暇取得についても休暇中の代講や学内業務などについても、多くの関係者のお世話になりながらどうか可能となった「調査」であった。関係各位に御礼申し上げる次第である。ただし、素人の旅日記につき、考証や資料参照について新しいものがあるわけではなく、考察にも誤りが多くあり得ることを恐れている。なおタイトルの「長い16世紀」は、世界システム派からの借用であるが、大航海時代・宗教改革・新大陸やアジアとの交易ネットワークの成立など、多くのグローバルイノベーションへの画期的事象が続いた時代というほどの意味である。

## 2. 天正・慶長遣欧使節のインパクト

慶長使節に関しては、スペイン王室やバチカンの資料館の原資料にまで当たった大泉光一の一連の著作（大泉 1999、大泉 2017など）があり、支倉常長を主人公にした歴史小説としても『侍』（遠藤 1980）がある。まずはこれらで使節の概要を把握させてもらった。牡鹿半島でみたガレオン船は、スペイン大使ビスカイノの帰国船が千葉県御宿で座礁したために、別途伊達政宗の支援で建造されたものであった。船の設計や工程管理はスペイン側が担ったとはいえ、短期間に大量の木材や釘を揃え、数百人に及ぶ船大工や鍛冶工を使って大洋を横断できる500トンクラスの船を建造した仙台藩の潜在力に感嘆せざるを得ない。サン・ファン・パウティスタ号は、1613年12月に月の浦港を出港し、3ヶ月後にメキシコのアカプルコに到着したと記録されている。ただ、政宗の企図したメキシコとの交易は、既存のスペイン商人の利害と対立することもあり、現地では歓迎されなかったらしい。その後、メキシコを横断してセビリアに入り、マドリード・パルセロナ・ローマと回った常長一行は、スペイン国王およびローマ法王への謁見は達成して1618年にアカプルコに戻ってきた。常長はフィリピンのマニラ経由で1620年に帰国するが、すでに幕府は厳しい禁教令を敷いていて、不遇な最後を遂げたことは、すでに触れた通りである。大泉光一によれば、伊達政宗

が使節を派遣した真意は、メキシコとの交易に乗り出して財力を蓄え、あわよくば幕府に対抗することになったとのことであるが（大泉 2017）、それもかなわなかったことになる。

慶長使節に比べるとイエズス会が組織した天正遣欧使節は、九州のキリシタン大名の名代となるメンバーで構成され、信長の公式な贈り物も携えて、現地でも大歓迎を受けたことが記録されている。使節の正使は、伊東マンショ（大友宗麟の名代）、千々石ミゲル（大村純忠の名代、有馬晴信の従兄弟）、中浦ジュリアン（中浦城主小佐々純吉子息）、原マルティノ（大村領原中務子息）の4人で構成され、いずれも有馬のセミナリヨ出身とされている。これらのキリシタン大名は、戦国時代にあってポルトガル商人のもたらす武器と富にも関心をもって積極的に彼らと関わっていたとされる。だが、彼らを送り出したキリシタン大名も、禁教後は国外追放、棄教、処刑など過酷な運命を辿ることになる。

度重なるキリシタン弾圧の後にも信仰を維持した人々はおり、その中には明治政府のキリスト教解禁後に来日した外国人神父たちに信仰を維持していたことを告白した「潜伏キリシタン」と呼ばれる人々や、解禁後も教会には戻らず独自に維持していた信仰を続ける「隠れキリシタン」と呼ばれる人々がいた。長崎、天草、平戸、五島列島などの隠れキリシタン関連の施設などを訪問するうち、司祭の導きもなく伝承のみによって伝えられてきた祈りの歌「オラショ」を知ることになった。皆川達夫は、これらの祈りの言葉や賛美歌が、16世紀イベリア半島のローカルな聖歌だったことを発見した（皆川 1988）。潜伏キリシタンの人々から、隠れキリシタンの人々が信仰の対象としていたマリア像が仏教的な観音像に似てきていることが指摘されることもある。しかし、世界のマリア像にさまざまな土着化したバリエーションがあることも事実であり、像のおもむきだけで信仰の真摯さを減じることにはならないだろう。隠れキリシタンの人々の「祈り」が深いものであったことは間違いない。

これほどの犠牲を払ってまで信仰を維持していた日本人がいたにもかかわらず、日本人のキリスト者比率は今でも1%にも満たない（石川 2019）。キリスト教伝来当時の日本人は、どのような「救済」の希望を託して、キリスト者となったのか。遠藤周

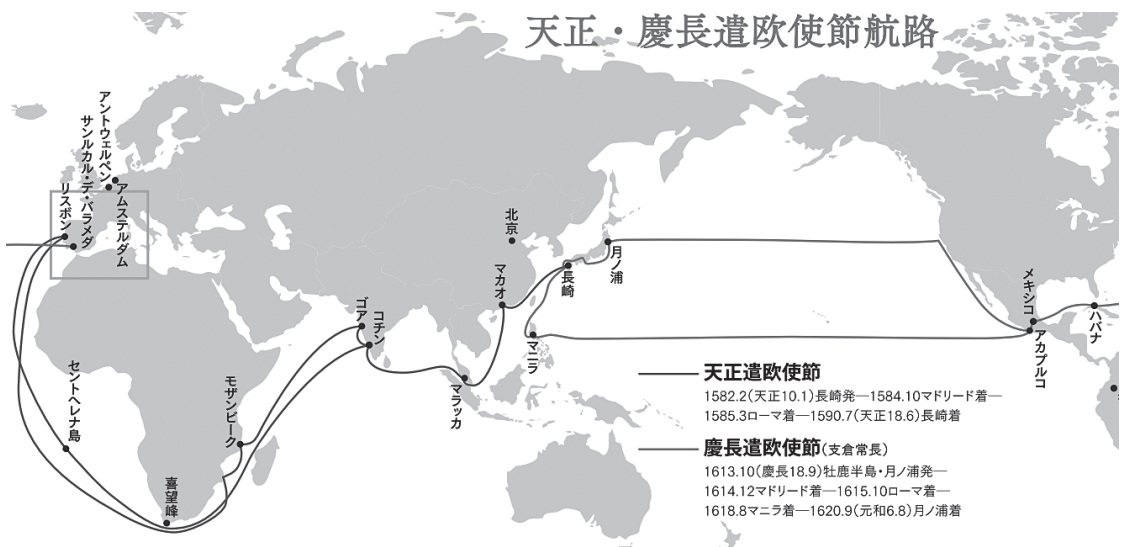
作（遠藤 1966）は、日本人の多神教的とも言える神仏概念の世界で布教するイエズス会神父の信念・当惑・逡巡のさまを描いている。

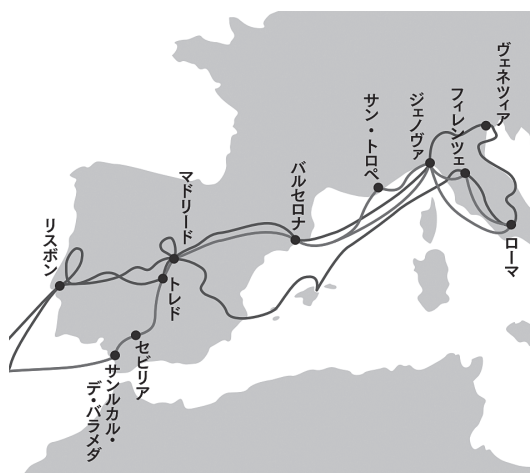
イエズス会は、宗教改革で揺れるヨーロッパから、カトリックの布教を使命として世界に宣教師団を派遣していたが、この派遣はポルトガル商人の交易ネットワークを通じて行われた。日本への宣教師の到着と鉄砲伝来などのポルトガル商人とのつながりは、偶然ではない。そして辺境への布教とその成果の誇示は、まさにイエズス会の使命そのものであった。1582年に長崎を出発した天正使節は、イエズス会の布教の拠点であるマカオ、ゴアなどを経て、リスボンに到着する。リスボンからマドリッド・バルセロナを経て、ジェノバからイタリアに上陸する。ここからローマに至る各地で、使節に対する歓迎ぶりは熱気を帯び、一行にはときに500人の兵士が護衛のためについたともいう。バチカンの大聖堂で行われた謁見の場では、教皇グレゴリウス13世は、彼らを抱擁し涙を流したとも伝えられている。カトリックの恩寵が東方の果てまで及んだことの喜びだったのかもしれない。これだけの歓迎を受けた行事のため、ヨーロッパ各地の教会などに歴史資料は豊富に残っており、それらを活用した使節の伝承には事欠かない。今回の旅の導きとなったのは、若桑みどり（若桑 2003）である。たとえば少年使節の一行が教皇拝謁の日、ローマのイエズス会の本拠地ジェズ教会からどの通りを通して、バチカンの聖

ピエトロ大聖堂に向かったのかまで詳細に考証している。また三浦哲郎（三浦 1982）も、同行した従者コンスタンティノ・ドラードの眼から一行の様子を詳細に描いている。ドラードは、少年使節を組織したアレッサンドロ・ヴァリニャーノが、ヨーロッパの印刷術を学ばせるために派遣した少年である。彼を通じて導入されたグーテンベルクの活版印刷機は、ヨーロッパで準備された日本語活字を使って、日本で最初の活版印刷を実現したとされている。天正遣欧使節についての各種史料の所在に関しては、伊川健二（伊川 2020）が、詳しく解説してくれている。

### 3. 紀行

ヴァリニャーノに率いられてまずはマカオに向かった少年使節は、無事に戻れるかどうか定かでない旅立ちと覚悟していたであろう。幕府のお目付役とともに太平洋を横断した常長も、命がけの出立であったことは間違いない。以下は、彼らの滞在した先々を、航空機と自動車という手軽な手段で訪問したに過ぎない。具体的な日付は省いているが、2023年8月から9月にかけての訪問である。また掲げてある参考文献への参照も十分なものではないことをあらかじめお断りしておく。彼らの渡航ルートを図を以下に紹介しておく。





(出所：九州国立博物館資料より)

### マドリードからリスボンへ

天正使節の一行は、長崎を1582年に出発したのち、イエズス会の根拠地であるマカオ、ゴア、と回り2年かけてリスボン入りしている。また慶長使節は、月の浦を出港して太平洋を横断し、メキシコのアカプルコに上陸。それから陸路メキシコを横断し、東海岸のベラクルスから、セビリアに入港している。今回は、マドリードから天正使節の訪問先をリスボンに向けて南下し、その後セビリアで常長ゆかりの場所を確かめる、という行程を組んだ。

ロンドン経由イベリア航空でマドリードに到着。空港でレンタカーを調達し、ヨーロッパ地図をインストールしたGarminのカー・ナビゲーションと持参したドライブ・レコーダを装着して出発した。市内で一泊したあと、まずはマドリード北西50kmにあるエル・エスコリアル修道院を目指すことにする。天正使節は、1584年にマドリードでフェリペ2世に拝謁した後、建築されたばかりのこの宮殿を訪問している。当時、ヨーロッパでもっとも豪華な建物として知られていた王宮である。確かにエル・グレコなど当代の美術品で装飾された回廊や天井に眼を奪われるが、圧巻は4万5000冊が所蔵された図書室である。金箔で装飾されたまさに万卷の書に息を飲む。エル・エスコリアルを訪問したもう一つの理由は、立花隆が絶賛した(立花 2004)ということもある。それは知の集積もさることながら、権力と富の集積のなかに厳しい宗教性を表現した建築でもあるとの言及があったためである。立花の「自

分の肉体を移動させて、はじめてみえてくるものがある」という言葉に触発されたこともある。その後、セゴビアの大聖堂とアルカサルを経て、アヴィラに向かう。アヴィラ大聖堂は、巨大きわまりないゴシック最初期の建築物である。エル・エスコリアルに匹敵するような3段に及ぶ祭壇は、ライティングされて金色に輝く。大聖堂は、要塞の城壁とつながっているが、その城壁の上から回りを眺めると、イスラムとの戦いのためにこれほどの城壁を築いたことにあらためて驚く。サラマンカも一行の立ち寄ったところで、ヨーロッパ最古の大学の一つが1218年に設立されている。サラマンカ大学図書館は公開され、当時の講義室もプロジェクターなどを備えて現在も使われている。ここからさらに西に向かい、イエズス会の本拠地であるコインブラに向かう。

国境通過前に、ポルトガルでの有料高速道路走行に備え、クレジットカードや車両ナンバーを、ポルトガルの交通局にあらかじめ登録しておく必要がある。両国はEUのシェンゲン協定国であるため、高速道路上に「国境」はないが、地形や植生が乾燥しきったメセタ台地の様相から、国境を越えたたとたんやや緑が増え潤いのある植生を目にするようになってくる。コインブラ大学のジョアニア図書館訪問は、予約したツアーにしたがって見学することに限定されている。まずは建物基部の学生卒の見学から、ツアーはスタートする。そして階段を上がって図書室に入ると、化学など自然科学関係の書も含めた書籍がずらりと並ぶ。書棚の横板には、中国人やアラブ人を含む絵柄が施されている。さらに、最上階では、金メッキで装飾された書棚に金箔の施された書物が壮観である。この図書館自体は18世紀の建築であるため、使節一行がこの金ぴかの図書館を訪れた訳ではないが、ヨーロッパにおける知の源泉の一つを訪れたことには間違いない。コインブラ大学は、イエズス会の本拠地が置かれていたため、イエズス会関連の展示もたくさんある。イエズス会の布教の歴史のなかに、「1549 Kagoshima」とあり、ザビエルの日比本到着や4人の使節と引率のメスキータが描かれた有名な絵も展示されている。また布教の歴史を述べた本が開示されており、中浦ジュリアンが穴吊りになって殉教する挿絵も紹介されていた。彼らの訪問と殉教の歴史もこちらに残されていることで、まずは彼らの足跡を確認することができ



た思いがする。

テンプル騎士団ゆかりのトマル・キリスト教修道院を経て、リスボンに到着する。リスボン到着の際、一行はテージョ河をさかのぼりながら、ベレンの塔を遠望して感激したということなので、まずは彼らの感激を共有すべくベレンの塔に向かう。隣のジェロニモス修道院も、かれらが訪問しその巨大さに感嘆したことが記されている。リスボンではイエズス会のロカ教会に滞在していたが、石畳の急坂の上にたつ教会は、祭壇も天井ドームにも華美な装飾はなく、質素さを感じた。日本での布教にあたっては、あまりに質素な身なりでは畏敬を感じてもらえないということで、ヴァリニャーノは布教や将軍との面会の際の服装や装飾品にも気を遣ったといわれている。時代は30年ほど後になるが、フランシスコ会のソテロも清貧と威厳とのあいだで気を遣っていた様子である。それにしても、これだけの富と権力の蓄積を見せつける建築群のなかで、教会内の装飾の多寡を論じては仕方がないという気はする。

その後ちかくの国立考古学博物館に向かい、2階の東洋部で狩野内膳、狩野道味の押印がなされている2対の南蛮屏風を見る。すると帆を張る水夫、傘をさしのべる人、荷物を積み卸しする人々は、全て黒人であった。屏風の左側には中国風の建物が描かれ、右側で荷下ろしをする場面は日本風となっている。千々石ミゲルが棄教した理由の一つが、道中各地で見聞した日本人奴隷に従えるポルトガル人の振る舞いだったという説もあるが、各地での人身売買はごく当然に行われていた時代だったかもしれない。

引き続き彼らが招待された、シントラの宮殿に向かう。ここはムーア人が山上に築いた砦の跡が残っている。いわばレコンキスタの最前線だったということになる。その後、イエズス会の神学校があったというエヴォラに向かう。エスピト・サント学院跡（現エヴォラ大学）は、夏休みのためか閉まっていたが、彼らが滞在したサンフランシスコ教会を訪れる。ここの大聖堂に続く納骨堂に宝物殿があり、そのコレクションを眺めるうち、「IHT」というイエズス会の紋章を組み込んだ螺鈿細工の書見台を見つける。出所が「16世紀日本」とあるので、エヴォラを訪れた彼らと関わりがあるのは、間違いないと思われる。大聖堂は華美な装飾はないもののホールは巨大で、マンショとミゲルが演奏したともいわれ

ているオルガンが2階に備え付けられている。彼らのイベリア半島での滞在先として、最後にヴィラヴィソザのドナ・カタリーナ公爵夫人の館に向かった。こちらには、ローマへの往路・帰路ともに滞在したらしいが、残念ながら公爵の館は開いていなかった。彼らが聖体ミサに参加した聖アグスティニーニョ修道院を訪問することはできた。彼らはヴィラヴィソザでかなりの歓待を受けたと記録されている（ファティマ 2020）。彼らはここからマドリードを経てローマに向かったが、ここからはいったん慶長使節の訪問先であるセビリアに向かうことにする。

### セビリアとコレア・デル・リオ

慶長使節に同行したソテロ神父はセビリア出身で、常長一行はセビリアでかなりの歓待を受けたことが記録されている。ここの古文書館では、Keicho Tsunenagaの書簡の実物を見ることができた。書簡の内容や経緯については解説されていなかったもので、後ほど調べる必要があるものの、常長が実際にセビリアまで来た歴史を感じることができた。さてセビリア近郊のコレア・デル・リオ市には、支倉常長の銅像が設置されている。日系人の寄付による青銅製の銅像だが、公園の柵内で距離があるので説明はあまり読み取れない。それでもこちらの市庁舎には、日本の皇族による植樹祭の様子などの展示もあり、日本との縁を感じさせる街であった。セビリアにもどり、涙のマリア像で知られるマカレーナ教会を訪問する。祭壇には涙の造形が施されたマリア像とやや色黒のキリスト像が祭られている。祭典のうちにこの両者が信者に担がれて教会の外に公開されるが、隣接の宝物殿にその際の動画が流されている。その熱気あふれる歓声とパレードは、ほぼお祭りのようにも感じられた。信仰にはいろいろな形態があっても構わないと素人目には感じるが、もちろんカトリックでもプロテスタントでもマリア信仰には議論が続いている。イエズス会自体が信仰のあり方を「霊操」として厳密に定めているので、「いろいろな形態」は論外であろう。しかし、救済をめぐる宗教的情熱に正統と異端を区別するのは難しいだろう。「いつでもどこでも誰にでも信じられてきたこと」が正統の定義（森本 2018：74）とすれば、どのようなキリスト像（あるいはマリア像）の受容

が、ある時点で「異端」論争を呼び起こすのか。日本におけるキリスト教の受容を考える上でも、マカレーナ教会のマリア像は刺激的であった。慶長使節に関しては、セビリア到着を確認することで一段落として、以後はローマに飛び、改めて天正使節の足跡を辿ることにする。

## ローマとその周辺

天正遣欧使節は、マドリッドでフェリペ2世に歓待され1ヶ月ほど滞在したのち、リヴォルノからイタリアに上陸し、ローマには1584年3月に到着した。まずは、彼らの最終目的地である、バチカンを訪問しておきたい。サンピエトロ大聖堂に入場すると、たまたま日曜日であったために大聖堂でのミサに参加することができた。イタリア語での説教と聖歌隊の聖歌を重ねながら、ミサは進行する。パイプオルガンの響きが聖堂内に満ち、非教徒ながら宗教的な疑似体験すら感じるミサであった。大聖堂を出て隣接するサンタンジェロ砦に向かう。使節がバチカンに向かう途中、この砦から号砲の響きがとどろいたという。砦からは市内が一望でき、使節が渡ってきたサンタンジェロ橋を見下ろして彼らの感慨についても追想像する。ただ彼らの教皇グレゴリオ13世訪問は、体調不良の中浦ジュリアンを除く3名で行われた。一説によれば、キリスト生誕祝いにマリアのもとに駆けつけた東方3博士の故事にならい、「東方」からの使者との対面を3名で行ったとも言われている。ともあれ教皇拝謁は、周到な準備のもとで行われたであろうことは間違いない。グレゴリオ13世はこの訪問後2週間ほどで亡くなり、新教皇シクストゥス5世の戴冠式にも、彼らは改めて招待されている。

以後、彼らはローマ周辺の諸侯からの歓迎に応えて、ローマからボローニャ、フェレンツェ、ヴェネツィア、ミラノ、ジェノヴァを訪問し、各地で大歓迎を受け、バルセロナに向かった。彼らが日本に帰り着くのは、出発8年後の1590年7月のことであった。翌年には、京都の聚楽第で秀吉への謁見も果たしている。こちらも、ローマで改めてレンタカーを調達し、アッシジ、フェレンツェ、ボローニャ、リヴォルノ、ピサと、彼らの辿った都市を訪問してみた。訪問先は、彼らが滞在した教会中心であったが、改めてその巨大な建築物に体现された富

の集積と収奪の大きさに感じ入らざるを得なかった。内装が比較的質素な、たとえばシエナの聖ドメニコ教会にしても、「大」聖堂であることには変わりはない。また陽光あふれる南イタリアの各地を回りながら、ギリシアやエーゲ海沿岸の豊穡な生命観あふれる多神教の世界が、なぜエルサレムを起源とする厳しい一神教の世界に集約されていったのかも不思議に感じた。資本主義の営利・蓄積のメカニズムの起源を、プロテスタンティズムの禁欲倫理に基づく「精神」に求める議論もあるが、この「機械」は近代人を精神なき専門人に追い込んだのではないのか。ゲーテ、ニーチェ、ウェーバー等も、アルプスを越えて南に行くことで感性を解放し、近代文明を見つめ直すことになったのではないか。さまざまな素朴な思いを抱きながら、帰国した。イエズス会とともに活躍したポルトガル商人の興隆は、同時期にすでにアジアで発達していた諸国の経済を利用したものであった。すると世界システム論の強調する地中海交易を世界システムの成長エンジンとする議論も、相対化する余地があるかもしれない。アジアおよび日本のグローバリゼーションの起点についても、再考すべき材料をさまざまに発見した旅であったと考える。

## 主要参考文献

- 伊川健二『世界史のなかの天正遣欧使節』吉川弘文館、2017年
- 伊川健二「天正遣欧使節の史料学」WASEDA RILAS JOURNAL 8 357-363、2020年10月
- 石川明人『キリスト教と日本人―宣教史から信仰の本質を問う』筑摩書房、2019年
- 遠藤周作『沈黙』新潮社、1966年
- 遠藤周作『侍』新潮社、1980年
- 大泉光一『支倉常長―慶長遣欧使節の悲劇』中央公論新社、1999年
- 大泉光一『暴かれた伊達政宗「幕府転覆計画」―ヴァティカン機密文書館史料による結論』文藝春秋、2017年
- 沖浦和光『宣教師ザビエルと被差別民』筑摩書房、2016年
- 五野井隆史『支倉常長』吉川弘文館、2003年
- 佐藤彰一『剣と清貧のヨーロッパ―中世の騎士修道

会と托鉢修道会』中央公論新社、2017年  
佐藤彰一『宣教のヨーロッパ―大航海時代のイエズス会と托鉢修道会』中央公論新社、2018年  
島田裕巳『帝国と宗教』講談社、2023年  
立花隆『思索紀行』筑摩書房、2004年  
玉木俊明『16世紀「世界史」のはじまり』文藝春秋、2021年  
デ・ソウザ、ルシオ・岡美穂子『大航海時代の日本人奴隷 増補新版―アジア・新大陸・ヨーロッパ』中央公論新社、2021年  
寺西重郎『日本型資本主義―その精神の源』中央公論新社、2018年  
羽田正『東インド会社とアジアの海』講談社、2017年  
ミルワード、ピーター『ザビエルの見た日本』講談社、1998年  
平川新『戦国日本と大航海時代―秀吉・家康・政宗の外交戦略』中央公論新社、2018年  
フロイス、ルイス『完訳日本史（豊臣秀吉編1）』中央公論新社、2000年  
三浦哲郎『少年讃歌』文藝春秋、1982年  
皆川達夫「オラショ、スペインに原典」『朝日新聞』1988年12月9日  
森本あんり『異端の時代―正統のかたちを求めて』岩波書店、2018年  
レイ、ファティマ「ヨーロッパにおける最初の日本のイメージ―ポルトガルでの天正遣欧少年使節」大分大学国際教育推進センター紀要、2020年3月  
若桑みどり『クアトロ・ラガッツィー―天正少年使節と世界帝国』集英社、2003年  
渡辺京二『バテレンの世紀』新潮社、2017年

